

## 会議内容（要約）

会議名	第2回 串本町役場庁舎建設検討委員会
開催日時	平成23年8月25日(木) 午後7時より(20時18分終了)
出席者 (委員)	中筋雄四郎(委員長)、田仲康慧(副委員長)、 小森正人、中村省一、須賀節夫、生熊和道、山口美野枝、 尾崎和貴、室 宣行、堀 登世、中野 實、芝崎晴一、 仙名静子、谷口好布、寺田展治
(オブザーバー)	国立和歌山工業高等専門学校 小池信昭 准教授
(当局)	清野副町長、稲生課長、鈴木副課長、大芝主査

### 内 容

去る8月25日(木)午後7時より、第2回串本町役場庁舎建設検討委員会が開催されました。

この日の会議は、次のとおり、小池准教授の講演を中心とした内容でありました。

1. 開 会
2. 委員長挨拶
3. 講 演 『東日本大震災の教訓と津波の破壊力について』  
国立和歌山工業高等専門学校  
環境都市工学科 小池 信昭 准教授
4. その他
5. 閉 会

はじめに、中筋委員長より、「東日本大震災の教訓と津波の破壊力というテーマで、国立和歌山工業高等専門学校の小池准教授より講演をしていただき、津波の破壊力などについて、私たちも学習を深め、今後の審議に役立てていきたいと思えます。」と挨拶をされました。

事務局より、小池准教授を紹介させていただいたあと、講演が行われました。

講演は、東日本大震災の被災状況や津波発生メカニズム等について、プロジェクターを使って解説する形式で進められました。

講演内容の要旨は、次のとおりです。

はじめに、東日本大震災の津波により被災した岩手県大槌町、陸前高田市及び宮城県南三陸町それぞれの役場庁舎の被災状況、一方、津波による大きな被害を免れた岩手県山田町役場について、立地状況や被災した建物の状態、構造について解説された。

このなかで、陸前高田市庁舎は、海から1km以上離れた位置にありながら、高さ12mから15mの津波が庁舎の4階部分にまで押し寄せたこと。

また、鉄骨建ての建物は、津波によって壁が破壊されており、津波に対して弱いことから、避難ビルとして不適切であるということが今回の震災でわかったと説明された。

一方、山田町では、役場庁舎、図書館、公民館そして保健センターが、高台10m以上の位置にあったことで津波被害を免れることができ、また現地の被災状況から、鉄筋コンクリートの建物は、被災はしているものの形は残っていることから、避難ビルは、鉄骨建てではなく、鉄筋コンクリートで建設することが好ましいとの見解を示され、今後、仮に海沿いに建物を建設するのであれば、6階もしくは7階以上の建物が必要になりますと述べられた。

次に串本町については、特徴として、半島のように突き出た地形で海から近いこと、津波が起これば、特に橋杭岩の方向から来る波が強く、また両側から津波が来る可能性があることから、串本地区は、かなり高台に避難しないと危険な場所であると指摘された。

マグニチュード8.6の3連動地震で想定されている現在のハザードマップで見ると、串本の広範囲のエリアが浸水する可能性があるため、役場庁舎を建設するのであれば、高台にあるのが理想と解説され、万が一、マグニチュード9.0の地震が発生した場合、そして3連動よりさらに4連動で地震が発生した場合、津波の高さが今の想定の2倍となる16mから17mに達する可能性があり、次に起こる地震が、1000年に1度に発生する規模であるかもしれないと想定して備えておく必要があると指摘された。

次に、今回の大震災において、津波が高くなった要因について解説された。

要因の1つは、リアス式海岸であったという点。リアス式海岸は、V字型になっており、間口が広く、奥に行くにしたがい幅がせまく、水の行き場がなくなってしまうため、海水が高くなって、湾の奥の町への被害が大きくなるというメカニズムであると解説。

もう1つの要因として、「浅水変形」を挙げられた。

「浅水変形」とは、水深が浅くなるにしたがって津波が高くなり、水深が深いところはスピードが速く進み、水深が浅くなってくるとスピードが遅く

なっていく。先に進んでいる波は、水深が浅くなるにつれスピードが遅くなり、後ろから続く波は水深が深くスピードが速いため、前の波に追いつき重なっていく、波が後ろからどんどん前の波に追いつき重なるメカニズムで津波が高くなると説明され、これら 2 つの要因で、10 数メートルもの津波が押し寄せたことになる」と解説された。

続いて、津波は高さだけでなく、破壊力を持っていることを岩手県宮古市田老地区の“万里の長城”と言われた 10m の高さがある防潮堤が破壊された例などを挙げ、高さばかりではなく、早い流れが破壊力の要因となっている」と解説された。

最後に東南海・南海地震について、発生要因を説明され、東日本大震災の発生から和歌山で地震が頻発するようになったことから、これまで 30 年以内に 60%から 70%と言われていた確率が高くなったかもしれないと指摘された。

そして、串本町としての対策として、三重県大紀町にある津波避難タワー等を紹介しながら、まずは高台に逃げるのが一番大切になってくる。あらかじめ高台に移るか、また避難路を整備しておくことがベターであると締めくくられた。

質疑応答のなかでは、委員から串本での液状化による被害を懸念する質問が出され、それに対し、液状化の専門ではないが、としたりうえで、おそらく震度 6 あるいは 6 強の地震であれば、埋め立てのところに建っているビルは傾いたり、水が吹き上げてくるところもあると思う。今後、地盤調査を串本町でもするべきかと思っている」と述べられた。

また、津波が到達時間に関する質問が出され、それに対し実際に地震が発生したときの震源域によって、第一派の到達予測時間は変わる。第一派でいきなり 10m の津波が来ることは考えにくいので、東日本大震災では、第二派が 30 分後に 10m もの津波が来たことで、あまり 6 分とか 8 分といった時間だけが一人歩きしていくことはよくないと述べられた。

その他のなかでは、以下のような意見が出された。

[委員] この委員に選ばれ、庁舎建設について、町民 40 人以上の方に意見を聞いてきました。

建設の時期については、5 年 10 年先でいいという意見でありました。

建設場所につきましては、町長が言われていたとおり、本庁舎と第 2 庁

舎を1つに統合したいということ、平成27年度で合併特例債の期限が切れるので、それまでにというように言われていたことを伝え、そのうえで、町民の意見として、現本庁舎本館の部分を取り壊して、新しく5階または6階建てで建ててはどうかという意見が圧倒的でありました。

それには3つの利点があると考えます。

1つは、町民の理解を得られるという点。

2つに、現在とは別の場所に新しく建った場合、経費が半分以下に抑えられると考える点。

第3に、庁舎と避難タワー両方の機能を兼ねることができる点であります。

その他、町民が心配しているのは、避難の際のブロック塀の倒壊であります。

串本町の人口は、65歳以上の人の割合が高く、ブロック塀が道路側へ倒れてくる恐れが高く、道を塞いでしまったときに、はたして避難ができるのかと、現状のままでは甚大な被害が出ると心配しています。

とにかく、大事なものは人命でありますので、高台へ逃げることができるのかを町民が特に関心を持っていることでもあります。

[委員] 現在の役場を新築するとなった場合、必ず仮庁舎が必要になります。仮庁舎に防災設備や通信設備、データを移し、そして庁舎が完成すればまた移してくることになる。そうした費用がかかってくると思いますが、そういった費用についてどう考えるか。

また、駐車場が狭いため、駐車場を確保することができるのかと考えています。

[委員] 鉄筋コンクリートで建ったほうがと言われましたが、津波に被災したあと、建物は残っても建物の内部が被害を受けてしまえば、役場としての機能がなくなってしまうことを頭に置いておかないといけない。建物の内部についても被害を防ぐことを考えないといけない。

その他、串本町の人口等の推移について、資料に基づき説明しました。

[事務局] ……資料に基づき説明

[委員] 平成22年から23年で人口が増えているが、この要因について説明してください。

[総務課長] この数字につきまして、平成22年度までは国勢調査の人口であります。平成23年の人口は住民基本台帳の人口であり、国勢調査は住民基

本台帳ではなく、そこで実際に生活をしている方を調査していますので、例えば、自宅を離れ大学に行っている方などは、この人口から差し引かれることとなります。

[委員長] 他に意見はございませんか。ないようですので、本日の委員会はこれで終了いたします。小池先生のご講演に対し、その他意見により関心を深く持って意見を出していただき有難うございました。今後の委員会においてさらに審議を深めていただきたいと思いますのでよろしくお願い致します。本日はどうも有難うございました。

以 上